



Osaka Gakuin University Repository

Title	<i>Writers on America</i> に見るアメリカの理念と作家の役割 American Ideals and Roles of Writers in <i>Writers on America</i>
Author(s)	山口 修 (Osamu Yamaguchi)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 76 号 : 1-22
Issue Date	2018.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

Writers on America に見るアメリカの理念と作家の役割

山 口 修

序

Writers on America (2002) は、21世紀早々アメリカが見舞われた9.11の危機に際して、アメリカ国務省によって発行された、15人の作家たちによるエッセイ集である。アメリカ政府公開の文章ということで、青山南は「翼賛的な文章がならんでいるのではないか」(5)懸念したと述べているが、時期を考えれば誰もが同様に感じる思いであろう。しかし実際には、攻撃直後の愛国主義的熱狂がアメリカを包んでいたにもかかわらず、冷静な現状把握とともに多様な意見が述べられ、自由を尊重するアメリカの懐の深さを示すものになっている。公表から20年近く経とうとする現在も International Information Programs と題された同省のホームページ上で公開されていることから、このエッセイ集に書かれた内容をアメリカが重視していることがうかがえる。

編集者 George Clack は、エッセイ集作成のきっかけが作家であり外務省職員でもある Mark Jacobs によるものだとし、次のように説明している。

If we were to ask a contemporary group of American poets, novelists, critics, and historians what it means to be an American writer, Jacobs proposed, the results could illuminate in an interesting way certain America [sic] values — freedom, diversity, democracy — that may not be well understood in all parts of the world. (Introduction)¹

この文章からは、アメリカ建国以来の自由、多様性、民主主義という価値観を確認すると同時に、それが自国以外で十分に理解されていないのはなぜかを問い直そうとする、提案者 Jacobs の意図がうかがえる。

2017年、Donald Trump がアメリカ大統領に就任した。アメリカファーストをスローガンに掲げる彼の言動には、こうした自国を相対化しようとする視点が見られず、自国中心主義の方向へとアメリカを導いているかのようである。また移民への対応は多様性を失わせ、移民国家アメリカを分断しつつあると懸念するアメリカ人も多い。アメリカの行動が世界に大きな影響を与えることを考えるとき、現在も公開され続けている、作家たちが語ったアメリカの価値観、理念とは何かを、今あらためて問い直すことはアメリカの今後を見据える上でも重要だと考える。

Clack は本エッセイ集の特徴として、15人の作家たちの文章にアメリカの多様性が反映されている点を挙げ、中でも移民系作家たちのエッセイに見られる共通点として、執筆動機が幼児期の体験にある点を指摘し、次のように述べる。

For the writer with recent immigrant roots, it seems there are two rites of passage: first, recognizing both one's longing for and differences from the American mainstream, and then discovering the integrity of one's own culture. (Introduction)

二つの文化の中で揺れ動きながらアメリカ的価値観を受容しようと苦悩する作家の姿は、まさに、国民の多様性を重視しつつ、一方で国家として人々を統合していかなければならない矛盾に苦悩するアメリカ自身の姿でもある。では、二つの文化間で葛藤するこれら移民系作家たちは、どのようにその問題を克服しようとしたのだろうか。彼女/彼らがどのようにアメリカ的価値観を形成していったのか、そのプロセスに焦点を当てて考察し、作家たちがアメリカの理想、価値観をどのように考えているのか、またそれらをどのように実現しよう

としているのか明らかにしたい。本論では、特に幼少期に “two rites of passage” を体験し、アメリカを異文化として体験した4人の作家たち、アラブ系の Elmaz Abinader (1954-)、ヒスパニック系の Julia Alvarez (1950-)、ラトヴィア系の Sven Birkerts (1951-)、ユダヤ系の Michael Chabon (1963-) を取り上げる。さらに、エッセイ集の提案者でもある Mark Jacobs (1951-) 自身の異文化理解の方法を参照しながら、多様性と統合で苦悩するアメリカがその理念実現の困難を克服するためには何が必要なのか、そのための作家の役割は何かを考えてみたい。

1

そもそもアメリカとはどのような国家なのか。鈴木透は、アメリカは未完成の状態から国家を築き上げていくという「壮大な実験を宿命づけられて出発した実験国家」(5)であり、試行錯誤をしながら完成を目指している国家であると述べる。国家建設のために国民や社会の統合力が働くが、その統合化のベクトルは国内に共通の価値観を作ろうとする一方で、特定の価値観を社会に押しつけようとし、結果、統合化の力が強まれば強まるほど多元化のベクトルが活性化される。この二つの力のぶつかり合いが、アメリカを前進させる推進力になっていると説明する。つまりアメリカには国家建設の前提として、多元化と統合化という二つの力、価値観が存在することになる。奇しくも Clack は “how varied these essays are”、 “certain common threads appear among the essays” (Introduction) と、本作にこの二つの特徴を見出しているが、「多元」と「統合」の二項対立はアメリカの宿命といえるだろう。では作家たちはどのようにその問題に取り組んだのだろうか。

Elmaz Abinader のエッセイは “When I was young, my house had a magic door” (9) という一文で始まるが、このドアが幼少期の彼女の世界を二分する。ドアの外側では “darkie”、 “a kinky mop”、 “ape” (11) といった言葉で、他の女の子たちから違うことをからかわれる一方、ドアの内側では部屋中

が“Arabic bread”(11)のにおいて満たされ、アラブ料理が並び、アラビア語で昔話が語られ、政治談義が繰り上げられる。内側の世界は彼女を“joy and belonging”(14)で満たしてくれた。しかしアラブの価値観が重視される一方で、ドアの内側にあっても、外の世界の視線が彼女の生活の一部には組み込まれていた。もしこの内側の世界が外の世界の人たちに知られたら、“social outcast”(14)となるのではとの恐怖を彼女は取り去れず、家族もそれを強く意識している。

The reputation of our family relied on our perfection and my parents had no idea that their struggling-to-be-perfect daughters digested unsavory ridicule from their peers. (12-13)

外の世界で自分がどのように評価されるかによって、彼女の一族は評価される。子どもたちはこのことをつねに意識し続けなければならない、ドアの内側でも外部の視線からは逃れられないのである。

本エッセイ集の親の世代に移民してきた作家たちに共通して見られるのだが、親は自分たちが生まれ育った国の文化的価値観を子どもに共有することを求める一方、新しいアメリカ的価値観をも身につけるよう求める。そのため子どもたちは、二律背反ともいえる難題を背負わされる。内と外の世界を日々行き来する子どもは、家庭内にもアメリカが抱える問題が縮図として存在していることを自覚せざるを得なかった。Abinaderはこの問題にどのように取り組んだのだろうか。

大学時代の経験が彼女の作家としての方向性を決定づけたようだ。彼女の大学には“Nationality Classrooms”(15)というのがあり、各国の文化的考えが反映されるよう教室がデザインされていた。ここでもアメリカとアラブがドアで分けられていたが、友人とその部屋に入り、アラブ文化を象徴する多くのものを目にした瞬間、彼女にはアラブ文化への誇らしさが湧き起こる。そしてア

ラブ文化と自分とのつながりを友人たちに語り始め、アラブ料理を振る舞い、自分の部屋に招きパーティを開くまでになる。だが大学にはアラブ文学の科目もなく、アラブについて語れば語るほど “my display of my Arab-ness served to exoticize me” (15) と自分の異質性が強調され、社会ではアメリカが必ずしもアラブに対して肯定的ではないことに気づくようになっていく。

ヨーロッパ系男性が書くアメリカ文化をテーマにした文学が外の世界の主流となる中、作家になった彼女は祖父や父母たちが生きた時代を、ドアの内側の世界を書き続けていた。しかし、外の世界で受け入れられたという感覚をもつことはなかった。あるとき、彼女は中国系アメリカ人作家 Maxine Hong Kingston の本から大きな刺激を受ける。

In essence, this writer knew, she knew, what was inside the door and she wrote about it. This book not only led me to the body of literature available in the Chinese-American canon, but I found African-American, Latino, Native American writers, whose voices resounded about some of the same issues: belonging, identity, cultural loneliness, community, and exoticization. (16-17)

Kingston がドアの内側の世界を知り尽くし、様々な民族的、文化的背景の中、アイデンティティや孤独、疎外感という自分と同じ問題を書き続けていることを教えられる。Kingston によって、彼女は自分が作家としてドアの内側の世界を書いてきたことが間違いではなかったと感じたのである。さらに黒人作家 Toni Morrison の影響もあり、Abinader は、“As a writer, I was also an activist. Telling a good story, writing a beautiful poem pierced the reader more deeply than any rhetoric could manage” (17) と、作家の役割を自覚するようになる。

9.11を経験し、ますますアラブ人たちにはつらい時代にあって、作家の役割

は大きくなると彼女は考えている。

I have a new small town. It's not anywhere in particular, or maybe it's everywhere. In this village, people live with their doors open, moving back and forth over the threshold of what has been exclusive to what will some day be inclusive. (18)

この小さな町は、アラブだけでなく、自分のルーツとなる文化とアメリカの二つのアイデンティティに苦悩する様々な移民が住む町である。外の世界を恐れ、ドアを閉ざすのではなく、ドアを開け、それぞれの家を行き来できるようになる時、多くの対立は和らいでいくだろう。作家として内側の世界を描き続けることで、友人とアラブ文化を共有したように、自分たちの世界を他者に知ってもらい共感してもらうことが、作家の役割だと彼女は考えるのである。

この考えは9.11後、アラブ世界で起こる数々の悲劇を前に、フランス人哲学者 Jean-Paul Sartre 同様、文学に何ができるのかと問いかけた岡真理と通じる。岡は次のようにいう。

ジャーナリズムは戦争といった問題が起きてのちはじめて、それらの問題が生起する社会について伝える。だが、大切なのは、そうした出来事すべてに先立って、人々がどのようにその生を営んできたか、何を愛し、何を慈しみ、何を大切に生きてきたか、そうした生の具体的な細部ではないだろうか。それを知らなければ、私たちは、戦争や占領が彼、彼女らからいったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知ることもできない。そして、戦争や占領が人間からいったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知らないままに唱えられる「反戦」や「平和」は、それがどれだけ正しくても、抽象的なお題目にとどまるだろう。

記号に還元されない、人間が生きる具体的な生の諸相を描き、私たちの

人間的想像力と他者に対する共感を喚起するもの、そのひとつが文学作品であるとすれば、冒頭のサルトルの問いに対する答えのひとつがここにあるのではないか。(12-13)

自分の世界を知ってもらうために自分の世界を描くことが、作家の、文学の役割だというのが岡の答えだが、それは Abinader に通じるものがある。

次にヒスパニック系作家 Julia Alvarez について見ていこう。ドミニカが独裁政権下にあった1960年、彼女が10歳の時、父親の地下活動が明るみになり一家はアメリカへと国外脱出してきた。² 当時のことを彼女は次のように書いている。

The minute we landed on American soil we became “spics” who spoke our English with heavy accents, immigrants with no money or prospects. Overnight, we had lost everything, our country, our home, our extended family structure, our language (22)

自分が異邦人であることを痛感し、故郷を、母語であるスペイン語を失い、移民として戸惑う様子がよくわかる。

彼女もまた Abinader と同じように、両親から二律背反的難問を課される。彼女が育ったドミニカでは、女性の読書や勉強に対して否定的であり、子どもは両親に従順であることが求められていた。

My sisters and I were caught between worlds, value systems, languages, customs. And this was our challenge, which is the challenge for many of us who are immigrants into a new world that is different from the old one of childhood (23)

“worlds, value systems, languages, customs” といった語が複数形で表現されているところに、彼女が住む世界の複雑さや問題の多さが現れている。このような環境は、彼女のアイデンティティ確立に大きな影響を与えた。彼女によれば当時の社会では、移民はアメリカ社会に同化し過去との結びつきを断つことで、代償としてアメリカ市民権を得るという状況だった。(24) 多くの場合、自分のルーツたる国の文化的価値観をあきらめなければならなかった。彼女は “I had become a hybrid” (24) と述べるが、この “hybrid” はけっしてポジティブな意味ではない。なぜなら “I was not a mainstream American girl and I wasn’t a totally Dominican girl anymore” (24) とあるように、自らのアイデンティティを分裂させる負の “hybrid” だからだ。そのため彼女は帰属感を強く求めるようになる。

その孤独感と帰属願望が彼女を文学の世界へ導いた。彼女は雑誌インタビューで “finding such an unfriendly, unwelcoming world, I was thrown back on my own resources. I became a reader. . . . It seemed a much better world to settle into than the United States of America of 1960” (Alvarez “Interviews”) と答えている。その文学の世界で彼女はアメリカの詩人 Walt Whitman と出会う。Whitman は多様性が主流へと溶け込むことに反対し、“I resist anything better than my own diversity” (25) と歌う。公民権運動を経て、Alvarez は “Freedom was the opportunity to shape a country, to contribute to the ongoing experiment, never tried before, of making out of the many, one nation, indivisible with liberty and justice for all” (26) と認識するに至る。

また Alvarez は、詩人 Langston Hughes から大きな影響を受ける。Hughes は、アフリカ系、ユダヤ系、ネイティブ・アメリカン系の血を引く家系に生まれた。多様性を身に纏った Hughes が “I, too, am America” (28) と歌うとき、Whitman とは異なる、新しいアメリカの歌を彼女は聴いたにちがいない。批評家ケアリー・ネルソンは、Hughes の果たした役割を「黒人に対

する抑圧をアメリカ社会にゆきわたる貧困と差別とに繋ぐべく、数々の努力をした」(ネルスン 1192-3)と評しているが、差別を乗り越え、多様性を当たり前のこととし、自分をアメリカ社会の一員だと主張する Hughes のアメリカの歌の中に、彼女は自分の居場所を得ようとしたのだ。彼女は自分の役割を次のように述べる。

My work as well as my vote contribute [sic] to the richness and diversity of the whole. By our active and committed presence as citizens of different ethnicities, races, traditions, and linguistic backgrounds, we challenge America to expand its understanding and compassion and thus grow stronger as a nation. (29)

彼女も Abinader と同じように、自らのアイデンティティを主張し、それを理解してもらおうと試みているのがわかるだろう。

移民としての疎外感を経験し、マイノリティの側に属するからこそ、彼女はアメリカの理想を重視する。

To create this kind of nation is to present a model of a world where we all belong. But this America can only be achieved if each person is free to be the rich and complex person he or she is. (30)

という彼女の言葉には、理想国家の実現には、自由と多様性が重要だという思いが込められている。それゆえ、彼女は自らを “I am truly an all-American writer” (31) と呼び、

Ay sí,
(y bilingually):

Yo también soy América

I, too, am America (35)

と、二つの言葉でアメリカを歌い上げるのである。

以上、Abinader と Alvarez の見出した異文化問題を乗り越える方法は、二つの文化を融合し主流へ同化する方法ではなく、自文化の独自性を表現し多様な世界を理解してもらうことで共存する方法であった。そのため彼女たちは自由を重視するのである。

3

次に二人の男性作家 Birkerts と Chabon について見ていこう。Birkerts は、ラトヴィアから移民してきたばかりの両親の元に生まれている。両親は家庭ではラトヴィア文化、ラトヴィア語の神聖性を重要視していたが、“cultural preservationists” (40) ではなく、同時代の波に合わせるような人物たちだった。にもかかわらず、彼は “My ruling obsession through all the years of my growing up was to shed every trace of foreignness — otherness — and to become a full-fledged American” (41) と、自分の異質性を意識せずにはいられなかった。その原因は、例えば、言葉であり、自らの名前にあった。両親が大っぴらにラトヴィア語を使うため、彼は、学校ではわざと英語のスラングを使って仲間意識を得ようとする。だが、帰属感を感じることができない。また、“We were strangers from a strange land. My father’s name, not Jack or Ted, was Gunnar, my mother’s, Sylvia. I was, God help me, Sven” (41) と、彼や家族の名前が示す「ラトヴィア」が外の世界との間に壁を作っていた。

大人から見れば些細に思えるものでも、子どもには他者との違いは意識せざるを得ない。彼は友だちと違うことを恥ずかしく思い、ふつうのアメリカ人になるため必死に演技を続ける。このとき彼が求めていたのは、“an easy athletic guy named Bob or Mark, or nicknamed ‘Chip,’ with a normal

crewcut (I was cursed with thick curly hair) and acceptably normal-acting parents” (41) など、いわゆる WASP 的アメリカ人像、価値観であった。

彼は後に、この「アメリカ」は世界中の誰もがもつようなステレオタイプのアメリカ像であり、広告代理店が作りあげた幻想に過ぎないことに気づくのだが、この WASP 的アメリカ人像に少し注意しておきたい。西山隆行は、アメリカで国民融解、再形成を表現する「坩堝」という言葉は、迫害から逃れたエスニック集団にとり一種のユートピア思想だったとし、次のように続けている。

だが、この坩堝の中に入ることが認められるのはヨーロッパ系のエスニック集団のみであって、いわゆる有色人種がそこに加わることは想定されないことが多かった。また、実際のアメリカ社会は、全てのエスニック集団が平等な立場で混ざり合う坩堝ではなく、トマト・スープのようなものだったと言われることも多い。

トマト・スープでは、パセリやセロリなどが風味を増すために加えられることはあっても、いずれはベースのトマトと一体化して原形をとどめなくなってしまう。(21)

「トマト・スープ」論は、WASP の文化的基盤は揺らぐことがなく、いずれはそれに同化するという考え方で、「アングロ順応論とでも呼ぶべきもの」(21)と説明される。先に見た Abinader が “darkie”、“a kinky mop”、“ape” といった言葉で差別され、Alvarez が “spics” とスペイン語訛りの英語をからかわれ、違いを強調された背景には、この「アングロ順応論」があったと考えられる。

Birkerts のアメリカ人像もその影響下にあったが、カウンターカルチャーが興隆し社会の中で違うことが受け入れられ始めると、彼の見方は相対化されていく。例えば、Philip Roth の *Portnoy's Complaint* (1969) の主人公 Alex や

J. D. Salinger の *The Catcher in the Rye* (1951) の主人公 Holden のようなアメリカ人作家たちが創り出した新しい英雄の生き方は彼の価値観を揺さぶり、彼は文学への関心を高めていった。

二十代の終わり、ヨーロッパ文学、特にオーストリアの作家 Robert Musil の作品から、自分の両親や祖先が暮らした地としてのヨーロッパを彼は身近に感じるようになる。その背景には幼き日の体験の積み重ねがあった。彼は “I was, in essence, connecting with the story-world I had grown up with” (49) と述べるが、幼少期に聞かされた昔話や祖父母の生活についての話が彼のアイデンティティの形成に関わっていたことに気づいたのだ。過去を振り返り、“the whole path of my life — writing life included — has been profoundly conditioned, first by the determined rejection, and then the veiled acceptance of my culture of origins” (50) といい、その原動力が “what it means to be American” (50) への強い感情だったことを明らかにしている。少年期の彼が望んだアメリカ的なもの、つまり WASP 的本流に流れ込むには、まず自文化を拒絶しなければならなかった。だが Musil の読書体験から、過去の拒絶ではなく過去とのつながりを意識させられ、Birkerts はアメリカ人であることの意味を新たな方向から発見する。

But, truth be told, it is not formative in the same way; it is laid on top of the other, the visceral. I might wish this otherwise. A different core awareness, a less obsessive investment in these fantasies of WASP normalcy might have made my passage easier, less painful. Alas, intriguing as these surmises can be, they lead us exactly nowhere. We are shaped by what we dream, and there we have no control. (51)

アメリカなるものは、民族性、多様性に関係し、少なからず彼の思想にも影響を与えている。しかし、それらを主張するだけでは発展性がないと彼はいう。

ステレオタイプなアメリカとラトヴィアやヨーロッパ文化の違いを実体験した彼は、この既存の区別を越えた何かを新たに生み出すことが、発展的なものになっていくのではないかと考えている。

小坂井敏晶は異質性の意義について次のように述べる。

多数派の常識と対峙するだけでなく、対立の前提をも乗り越える。異質な考えの衝突から生ずる破壊と再構築の絶え間ない運動。少数派は、その起爆装置だ。自らの変革を通して同時に世界を変えてゆく。そこに少数派の存在意義がある。(43)

Birkerts は作家として、破壊と再構築のための起爆装置の役割を果たそうとしているかのように思われる。

一方、ユダヤ系作家の Chabon は6歳の時、両親が購入した新興住宅地コロンビアでの経験を語る。そこはショッピングモールの発明者といわれる James Rouse が開発したもので、建設経済研究所の「アメリカのニュータウン開発」というレポートには「ラウス社はその当時人気だった、建築又は概観重視のハード中心の開発に幻滅していた。ラウスは代わりに例えば、生涯教育、市民協力、多様な人々の調和といった生活の発展や価値を高めるような実用的なまちづくりを目指した」とあり、コロンビアがまったく新しい価値観の元に作られたことがわかる。引っ越してくる住民たちが自らを“pioneers”と称していると Chabon は書いているが、彼らはこの地を新天地として見なしていた。展示センターには様々な資料図面が公開され、おそらく多くの移住者たち同様、Chabon 一家もその図面に魅せられていた。

The slide show featured smiling children at play, families strolling along wooded paths, couples working their way in paddleboats across Kittamaquundi or its artificial sister, Wilde Lake. It was a bright,

primary-colored world, but the children in it were assiduously black and white. Because that was an integral part of the Columbia idea: that here, in these fields where slaves had once picked tobacco, the noble and extravagant promises that had just been made to black people in the flush of the Civil Rights movement would, at last, be redeemed. (70)

スライドには見事なまでにアメリカの「平等」の理念が示され、帰り際に渡された地図は、地名や道路などは書き込まれているものの、子どもの想像力を刺激するに十分な余白、未知の世界をもった新天地アメリカそのものだった。このような幼少期の経験が、彼のアメリカ人としてのアイデンティティ形成に大きな影響があったのは間違いない。

しかし、彼の理想的な世界は人生において簡単には実現しなかった。両親の離婚、不幸や苦々しい人種関係など、彼が知らない現実が数多く存在した。彼が出た後のコロンビアも、“Columbia had failed in its grand experiment” (75) と噂され、犯罪や人種不安もある、理想とはほど遠い都市になってしまったかのようだ。夢と希望をかきたてられた少年期をここで過ごした Chabon には大きなショックであったであろう。だが、それにもかかわらず、彼はこういう。

The judgments of Columbia's critics may or may not be accurate, but it seems to me, looking back at the city of my and James Rouse's dreams from 30 years on, that just because you have stopped believing in something you once were promised does not mean that the promise itself was a lie. . . . How fortunate I was to be handed, at such an early age, a map to steer by, however provisional, a map furthermore ornamented with a complex nomenclature of allusions drawn from the

poems, novels and stories of mysterious men named Faulkner, Hemingway, Frost, Hawthorne, and Fitzgerald! Those names, that adventure, are with me still, every time I sit down at the keyboard to sail off, clutching some dubious map or other, into *terra incognita*.
(75)

自分と Rouse 共通の夢、新天地として多様な人々が共存できる都市の完成を彼はあきらめていない。作家の名前が挙げられているのは、彼の人生の方向づけに文学的想像力が役に立ったからだろう。まさに実験国家として、想像力を武器に、失敗にもかかわらず進み続けようとする彼の姿勢が述べられている。

Birkerts と Chabon には幼少期にモデルとなるアメリカ像があったが、現実の社会の中でそれがある種の幻想であることに気づく。だが、彼らは幻滅することなく、“dream”、“*terra incognita*”という言葉が示す世界をあらためて希求する。その原動力が“American Dream”という夢見る力、想像力なのである。

4

エッセイ集の発案者であり海外経験豊富な Mark Jacobs は、自らの経験に基づき異文化理解の方法を本作で提案している。彼は両親が同じアメリカ人でありながら Pennsylvania と Niagara Falls という異なる文化圏の出身であったため、両方の世界を理解することになり、両方の“American idioms” (150) を話すようになった。一方、外交の仕事を通じて、様々な言語や文化に触れ、それぞれの言葉を使うことでその文化に近づき、その一端を理解するという経験もしている。しかし社会の中でそれら複数の文化はぶつかり合い、“one place where the three languages came together seamlessly was a dream” (148) とあるように、互いが共存できるのは彼の夢の中だけだったと、現実の厳しさを述べている。このような経験が、彼が作家になる背景には

あった。

彼は異文化に近づくための極端な例としてポーランド生まれの英国作家 Joseph Conrad の “loss of home and language” (152) という経験を挙げ、作家として自分と異なる世界を理解し描くためには、自分の故郷や言語を捨て去るような深い経験が必要であることを示唆する。Conrad はそうすることで安定した場所を失い、永久に変化し続けることを強いられたが、結果 “cultural relativity” (152) を獲得する。Jacobs によれば、アメリカには建国当初から自分を作りかえることが可能だという考え方があった。古い自分を破壊しなければ新しい自分を入れられないのだが、自分を捨てきれず、結果少し変化しただけということも多い。その点 Conrad は過去とのつながりをすべて断つことで根本的に自分を作りかえ、“cultural relativity” を手に入れたと述べている。

では、Jacobs 自身はどうか。

Peace Corps and the foreign service do not come close to that kind of profound experience of remaking oneself. Every time I left the United States, I figured I was coming back. Although I acquired new ones, I kept my own language. I stayed plugged into my own culture; with today's technology, and the noise it generates, it's harder to unplug than it is to stay connected. . . . I was sometimes humbled and frequently surprised. I wasn't reinvented, but I think it's fair to say I was enlarged. (153)

彼は Conrad のように経験による徹底した自己変革ができていない。なぜなら、アメリカという “home and language” を断ち切れていないからだ。それどころか、彼はアメリカへのつながりを強く意識しつつ、異文化と相対している。だが、まったく変化しなかったわけではない。古い自己と断絶するのではなく、自己拡大したのである。つまり、自文化 / 他文化という対立の中、自

文化を捨てることなく他文化を吸収することで、対立を乗り越える視点を獲得したのだ。

彼の考え方には、最初に触れた経験の影響が大きい。両親の異なる文化を対立させれば家族は安定せず、ひとつの言語のみに特化すればその他の言語を話す文化との交流は行えない。個々の要素を対立させても、自分にとっていい結果にはならない。Conrad のやり方はひとつを失うことでもうひとつを手に入れるというトレードオフの関係にあり、自己拡大できないのである。

アメリカ人として他文化を理解するための方法について、Jacobs は本作の中でふたつの点に言及している。ひとつは、アメリカ人作家の間で、“trying to do imaginative justice to characters who are not American” (156) という動きが出てきていること。もうひとつは “the notion of paying careful attention to a culture not one’s own is even more compelling” (157) とあるように、他文化への注意深い配慮が重視されつつあることだ。また、“to truly appreciate the literature of one’s own culture, it was necessary to know that of another” (157) という19世紀の英国人批評家 Matthew Arnold からの引用も、この「文学」を「文化」に置き換えれば彼自身の主張と重なり、相手を知ることの必要性を重視していることがわかる。

Jacobs が、他文化を書こうとするアメリカ作家には書きたい国の入手可能な資料、文学が多数存在する (157) というとき、他文化理解のための努力の重要性が強調されている。異文化体験は、自分とは何かをあらためて問い直す視点を生む。インタビューで *Writers on America* の着想理由を尋ねられ、“a more nuanced — and therefore more realistic — sense of who we are as a society” (Jacobs “Talking”) と述べるが、まず自分たちが何ものかを知ることの重要性を彼は意識していた。たとえ読書体験であれ、異文化体験は自己を拡大させ、アイデンティティを再確認させる。その結果、夢の中でしか経験できていない満足感 (147) を得ることができるよう、自らを変えていくのである。

結論

以上見てきたように、彼女／彼らは幼少期に、ドアの内側の価値観と外側の価値観という、時に矛盾する世界の中で、自らのアイデンティティを形成しなければならなかった。そしてその成長過程で、彼女／彼らは最終的に自らのルーツを断ち切ることはできないことを理解する。あるものはその内側の世界を書くことで外の世界へ自らを開いていこうとすることを自らの役割とし、またあるものは、Clack が “a move beyond their personal experiences and communities — even beyond their Americanness — to a powerful sense of the universal” (Introduction) と述べるように、異文化間の対立を止揚して「普遍的なもの」を創り出そうと努力している。例えば、Chabon の代表作 *Summerland* (2002) は、周りから “a motley crew” (352) と呼ばれるような、人間と大小様々な異種の妖精たちからなる野球チームの話である。勝利によって世界を救うという目標の下、それぞれが欠点をもちながらも団結して戦っていく。主人公の一人 Jennifer T. は母親が “half Scotch-Irish and half German, with some Cherokee in there” (398)、父親は “half Squamish and half Salishan and half junkyard dog” (398) というまさにハイブリッドな少女である。試合では、生物種間の違いなどなんの意味もなく、それがそれぞれの長所として活かされる。多様性ゆえ、チーム内でそれぞれが自己拡大を起こすのである。これはファンタジーという文学の想像力が示すひとつの理想社会である。

Chabon 同様、Jacobs の考え方には、自文化／他文化の二項対立を相対化する視点が示されている。内部に自文化を抱えることの自明性を把握した上で、他文化を尊重し受容することで自己拡大するという考えは、自文化を書き続けることで他者の理解を広げようとする Abinader や Alvarez の姿勢を肯定するとともに、その先をいく考え方でもある。自分を豊かにするために他文化が存在するのだと考えれば、他文化を排斥することがいかに愚かな行為であるのかははっきりするのではないだろうか。このように、アメリカの作家たちは自由、

平等、“American Dream”といったアメリカの理想を希求し、想像力で人々に理想の世界を提示する役割を担っているのである。そしてこの考え方は、アメリカが移民国家として多様性と統合という矛盾を内包しつつ成長していくための一つの方法を示唆しているように思われる。

注

1. 本論の *Writers on America* からの引用はすべて、アメリカ国務省のホームページ (<https://usa.usembassy.de/etexts/writers/index.htm>、Accessed 18 Sept. 2018) で公開されているものに拠った。なお、Introduction を除き、読者の便宜のため青山南訳版の該当ページを記載した。また Whitman、Hughes、Arnold の引用も同サイトによる。
2. 翻訳版では「ドミニカ共和国の生まれ」(20) とあるが Alvarez の公式ホームページには “I was born in New York City during my parents’ first and failed stay in the United States” とあり、生後3ヶ月で両親とともにドミニカに戻ったとある。(<https://www.juliaalvarez.com/about/>、Accessed 18 Sept. 2018 参照。)

引用文献

- Alvarez, Julia. “Interviews: In the Name of the Homeland.” *The Atlantic Online*, July 19, 2000. <https://www.theatlantic.com/past/docs/unbound/interviews/ba2000-07-19.htm>. Accessed 7 Sept. 2018.
- Chabon, Michael. *Summerland*. New York: Hyperion Books for Children, 2002.
- Jacobs, Mark. “Talking with Mark Jacobs.” *Peace Corps Writers*, n.d. <http://www.peacecorpswriters.org/pages/2004/0401/prntvrs401/pv401talkjacobs.html>. Accessed 18 Sept. 2018.
- 米国国務省国際情報プログラム局 『私たちはなぜアメリカ人なのか』 青山南

訳 ゆまに書房 2003年

建設経済研究所 「アメリカのニュータウン開発」米国事務所アーカイブ2002
年度レポート 2003年3月 <http://www.rice.or.jp/archive/pdf/2002/j-report-usnewtown2003.pdf>. Accessed 5 Sept. 2018.

小坂井敏晶 『答えのない世界を生きる』祥伝社 2017年

ネルスン、ケアリー 「アメリカ詩の多様性」『コロンビア米文学史』吉田幸子
訳 山口書店 1997年

西山隆行 『移民大国アメリカ』ちくま新書 2016年

岡真理 『橐椰子の木陰で― 第三世界フェミニズムと文学の力』青土社 2006
年

鈴木透 『実験国家アメリカの履歴書― 社会・文化・歴史に見る統合と多文化
の軌跡』慶應義塾大学出版会 2003年

American Ideals and Roles of Writers in *Writers on America*

Osamu Yamaguchi

Soon after 9-11., many Americans asked themselves what it means to be an American. In *Writers on America*, fifteen writers answered the question. They refer to various American values such as freedom, diversity, democracy, etc. While America seems to be deeply divided with the advent of President Donald Trump, it is important to reaffirm what the American ideals are through this book. This paper shows how the writers in *Writers on America* think about their American ideals, and how they view the role of an American writer.

Elmaz Abinader, an Arabian, and Julia Alvarez, a Dominican, write stories about “inside the door,” that is, the stories based on their own cultural backgrounds. By doing so, they try to open the door of their cultures, and make Americans who have American mainstream cultural values, such as WASP values, understand them. Sven Birkerts, a Latvian, and Michael Chabon, a Jewish, realize the model of American life they adored in their childhood was based on WASP values, but that they are only a type of values. They emphasize the importance of dreaming, and try to seek their “terra incognita” in their works. Mark Jacobs, who has experienced many different cultures, gives emphasis to the importance of knowing other cultures and accepting a wide range of values. In this sense, “writing inside the door,” like Abinader and Alvarez, is one of the

important roles of writers.

Most of the writers in this book indicate that to make America an ideal place for all people, it is important to know each other well and understand various values. To do so, they try to write America as an American writer.